

首都大学東京のFD活動：現状と展望

基礎教育センター長
上野 淳

首都大学東京が発足して1年半。少なくとも、基礎教養課程におけるFD活動は定着しつつあり、その任務の重要性についても全学の周知と理解が深まりつつあると認識している。FD委員会及び教務課の構成メンバー、スタッフ、そして学内の広範な階層の人々のご尽力に深甚なる敬意と謝意を表する次第である。

平成18年度前期のみをとっても、基礎教養課程の主要な仕組みである基礎ゼミナール、情報リテラシー実践、実践英語、都市教養プログラムの全科目・全授業にSEとTEが悉皆的に行われたとともに、基礎教養課程全般についての学生の意識・評価を把握する「全学共通科目に関するアンケート調査」も初年次生を対象に悉皆的に行われた。言うまでもなくこの集計・分析結果は、各授業担当者にフィードバックされると共に、FDセミナーやFD講演会等で多角的な検証・議論の素材として活用されている。

本学のFD活動の特色の一つに、教務委員会・基礎教育部会及びその傘下の各部会においてこの調査結果に基づいた多角的な議論、検証、精査が行われ、次年度の課程編成の改善に不断に且つ実質的に活用されている点である。現実には、17年度調査の結果は18年度カリキュラム・時間割編成の改善に有効に機能し、現在、来年度の編成においても検証に基づいた幾つかの改革が進行している。FD委員会と教務委員会・基礎教育部会の連携こそが授業改善に向けての大きな力となり得ていることは強調されてよい。

基礎教養課程におけるFD活動を通じて、本学の授業の質、及び学生・教員の資質の高さには自信を持つことができた。全般として、健全な授業運営が達成されていると感じる。しかし、課題も多く、そして大きい。

- 1) 各部局・専門課程へのFD活動の浸透・深化
- 2) 各授業の調査結果の適切な形での公表
- 3) 集計結果の多角的なそして継続的な分析とデータベース化
- 4) 学生参加と職員参加
- 5) FD活動の揺るぎない定常化

などである。更なる前進が期待される所以である。

